

発達障害者の自己理解に関する概観と芸術活動の可能性

修士課程 1 年	石	川	千	春
博士課程 1 年	一	柳	貴	博
博士課程 3 年	信	吉	真	璃奈
修士課程 2 年	冷	牟田	将	吾
教授	下	山	晴	彦

1. 自己理解

本章では、発達障害者の自己理解の必要性や困難さ、特徴について論じ、発達障害者の自己理解を支える支援の検討が喫緊の課題になっていることを指摘する。第1節では、まずその前提となる自己理解について論じる。

i) 自己理解とは

本節では自己理解について、その前提となる自己に関する議論を含め記述する。さらに自己理解の特徴を捉えるため、自己理解の発達の変化に関する研究を概観する。

自己理解とは、「他者との関係で、今、自分の内面に生起している感情をありのままに意識し、さらに自分の性格傾向や考え方について知り、自分に対する理解を深めること」(杉浦, 2002) であると論じられる。このような自己理解という概念への理解の前提として、「自己」についての概念を整理する必要がある。心理学の観点から「自己」に関する体系的な研究を最初に行ったのは、ジェームズ (James, W. 1842-1910) であるといわれている。James (1892) は、自我を識別された二側面と捉え、一つを客我 (me), もう一つを主我 (I) と呼んだ。すなわち、客我とは「認識される自己」であり、主我は「認識する自己」である。そして、この客我を広く捉え、「考えうる最も広義においては、人の客我とは、人が自らのものと呼ぶものすべての総和である」とした。ジェームズの理論は、客我を広く捉えすぎているため、定義に矛盾があるという指摘もなされる (梶田, 1988) が、この自己の二重性の理論は伝統的に踏襲され、自己概念や自己理解の理論においても、その枠組みは活用されてきた。

次に、自己理解の発達の変化に関する研究を概観する。自己理解の発達の変化について検討した Damon & Hart (1988) によれば、自己理解は、主体的自己及び

客体的自己という両者についての自己の知識と定義される。彼らは自己理解発達モデルとして、客体的自己を身体的自己・行動的自己・社会的自己・心理的自己の4つの領域に、主体的自己を連続性・存在・相違の3つの領域に分け、さらに全領域に共通した4つの発達レベルを設定した。佐久間・遠藤・無藤 (2000) は、この Damon & Hart (1988) の自己理解モデルにもとづき、その一部を改作した分析枠に沿って、幼児期・児童期の自己理解の発達を検討した。その結果、年齢の増加に伴い、身体的・外的属性に関する描出が減少し、行動及び人格特性に関する描出が増加することが明らかになった。また、年齢の増加に伴い、使用される特性語の種類が増加することや、否定的側面 (嫌い・悪いところ) を描出するものが増加することが明らかとなり、年齢が上がるにつれて、自己のより複雑な部分や内面を理解し、それについて表現できる幅が広がっていることが推察される。さらに、滝吉・田中 (2009) は、思春期・青年期に当たる中高生の自己理解について検討している。その結果、中高生が自己を理解する際、他者と自己との間の一方的なかわりや影響よりも双方向的なかわりや影響を踏まえた言及または他者との関係や影響を全く交えない言及が多いことが明らかになった。また、対人性のない自己理解の場合は否定的言及が多く、相互的な対人性を踏まえた自己理解の場合には肯定的言及が多いことも明らかにされている。

以上より、自己の二重性の理論が踏襲される中で自己理解が論じられてきたことや、年齢を重ねるにつれ、自己の複雑性への理解や対人性をふまえた自己理解がなされるようになるという発達の変化が、本節の自己理解に関する研究の概観により示されたといえる。

ii) 自己理解の必要性

本節では、自己理解の必要性について論じる。特にキャリア形成との関連でその重要性が強調されることから、キャリア形成に焦点を当て、自己理解の必要性を論じる。

厚生労働省（2001）は、キャリア形成に必要な6つのステップのうち自己理解を第一にあげ、文部科学省（2011）も「自己理解能力は、生涯にわたり多様なキャリアを形成する過程で常に深めていく必要がある」としている。このような観点から、渡部・渡部・小池（2015）は、キャリア教育の効果測定のための自己理解尺度を作成しており、自己理解尺度の項目には「わかっている」などといった認識面だけでなく、「行動できる」などといった行動・実践や意思決定までが含まれることが示された。さらに、自己理解に関する日本及び海外の先行研究を概観した青木万里（2009）は、自己理解に関するプログラムの実施が、自己理解にとどまらず、自己肯定感、自己受容、自己実現、他者理解の向上をはじめ、自己の内面にさまざまな変化をもたらすことを示した。以上より、自己理解とは、肯定的な面も否定的な面も含めて自分を正しく理解することであり、同時に自己概念や自己意識といった多様な自己の側面を明確に獲得していく過程を促進する働きをもつことが考えられる。そして認識面だけでなく行動・実践や意思決定も含めて自己理解を深めていくことが、キャリア形成に向けた重要なステップになると考えられる。

本節では、発達障害の有無にかかわらずキャリア形成において自己理解が重要であることを論じた。次節以降で記述する発達障害者にとってもキャリア形成は重要な課題であり、本人が望むキャリア形成を実現していくためにも自己理解の促進は非常に重要であると考えられる。

iii) 発達障害者の自己理解の必要性

本節では、発達障害者の自己理解の必要性について論じる。本節の検討を通して、二次障害の予防や心理的な安定、本人が望むキャリア形成の実現のために自己理解の促進が極めて重要であることが示された。

田中・廣澤・滝吉・山崎（2006）は、児童期・思春期の軽度発達障害児が抱く「自分とは何か?」「自分はなぜ人とは違うのか?」といった自分自身についての問いに対して、その実態を明らかにすることは、そのような疑問に対する適切な支援のあり方を考え、二次障害を防ぐための第一段階になると述べている。また、山根（2016）は知的障害児・者の自己の発達に関する文献的考察を行

い、二次障害の予防として、周囲のサポートや環境調整だけではなく、知的障害児・者の自己理解や自己肯定感を支える必要性を論じている。青年期を過ぎた知的障害者を対象としたWhitney-Thomas & Moloney（2001）では、当事者が青年期特有の自己定義や自主性の問題に直面し、アイデンティティ達成の問題を抱えていることが示唆されている。そのような当事者ほど周囲の支援を活用する術をもたず、地域の社会的サポートを確保し自己決定ができるようになることが重要だと示されている。逆に、自己定義が進んでいる知的障害者ほど、心理的に安定していると報告されている。以上より、知的障害を含む発達障害者にとって自己理解を深めることは、二次障害の予防や心理的な安定につながる極めて重要なことであるといえる。

さらに、発達障害者のキャリア形成においても、自己理解を深めることの重要性が指摘されている。向後（2015）は、自己理解を支援することで、職業準備の課題が明確化し、その結果として自分に合った支援の検討と選択が可能になることを述べており、高瀬・今村・奥村・小脇・松久（2016）も、発達障害学生を就労支援システムに結びつけるためには、障害受容を含む自己理解を進める支援が重要であることを指摘している。さらに、労働における合理的配慮は個々の事情を有する障害者と事業主との相互理解すなわち話し合いの中で解決を図るとされるため、障害者の自己理解がこれまで以上に求められること（松為、2015）や、就職し働き続けるためには「自分を知る」ということが大切であり、自己理解を促していく必要があること（内藤、2009）も指摘されている。発達障害者が就職時や就職後に本人が望むキャリアを形成していくためにも自己理解を深めていくことは非常に重要であるといえる。

以上より、発達障害者にとって二次障害の予防や心理的な安定、本人が望むキャリア形成の実現のために自己理解の促進は極めて重要であることが示されたといえる。

iv) 発達障害者の自己理解の困難さ

本節では、発達障害者の自己理解の困難さについて論じる。発達障害者の自己理解について、自己概念が否定的事であることや、自己が極めて曖昧であることなど、その困難さが示された。

発達障害者の自己理解に関して、金井・上村（2007）は、アスペルガー症候群の中学生の自己概念に関する項目を含む質問紙調査を実施した。その結果、アスペルガー症候群の中学生の自己概念が同年齢集団に比べ否定

的であることが示唆された。高機能自閉症児の自己理解の特性について検討を行った小島（2014）においても、高機能自閉症児の自己理解の低さが示され、自己理解の困難さを抱えている事例も認められた。佐藤・櫻井（2010）は、自閉症の診断を受け、芸術活動において才能を発揮した Donna Williams の自伝を分析し、自己の様相についての検討を行った。その結果、自我の境界の弱さや統合の弱さにより、主体としての自己が極めて曖昧であることや、他者とのコミュニケーションが曖昧な主体としての自己を喪失するような危機をもたらすこと、さらにはそうした自己喪失の危機に対して解離や他者との接触の拒絶という対処を取ったことで、自分の世界がないがしろになり深刻な自己評価の低下にいたることがあることを指摘している。また、滝吉・田中（2011a）は、自閉スペクトラム障害者が自己を概念化してとらえようとするときに、その概念化のために適当な出来事や体験を想起し、意味づけることが難しいことを指摘しており、自閉スペクトラム障害者が過去の体験や出来事を振り返り、そこに意味づけするための心的作業を援助し、促進していくことが必要であることを述べている。

以上より、発達障害者の自己理解については、自己概念が否定的であることや、自己理解が低く困難さを抱える事例があること、自己が極めて曖昧であること、自己と出来事を意味づけることが難しいことなど、その困難さへの指摘が多くなされていることが示された。また、本節であげた先行研究はいずれも自閉スペクトラム障害者を対象としており、発達障害の中でも特に自閉スペクトラム障害者の自己理解の困難さがうかがわれた。

v) 発達障害者の自己理解の特徴—対人関係の中での自己理解の困難さ—

本節では、発達障害者の自己理解の特徴やプロセスについて論じる。対人関係の中で発達障害者の自己理解が促進される可能性がある一方で、対人関係の中での自己理解の困難さも指摘されており、対人関係の中で自己理解を促す方法以外の支援を検討することの必要性が本節で示されたといえる。

まず、発達障害者の自己理解の特徴について記述する。思春期・青年期における広汎性発達障害（以下、PDD）をもつ人が自己をどのように理解しているかを明らかにするため、滝吉・田中（2011b）は22名のPDD者（生活年齢は平均14歳8カ月、範囲は12歳4カ月～18歳6カ月）に自己理解質問を実施し、自己理解分類モデル（SUMPP）に基づき、自己理解領域、対人性タイプ、肯定・否定の3つの側面において分類している。その結

果、PDD者は、(1)他者との相互的な関係を通して自己を否定的に理解し、他者の存在や影響をまったく考慮せずに自己を肯定的に理解する傾向があること、(2)「行動スタイル」の領域における自己理解が多く、その中でも障害特性としてのこだわりに関連する「注意関心」の領域が自己評価を高く保つために重要であること、(3)自己から他者、あるいは他者から自己へのどちらか一方的関係の中で自己を理解することが多いこと、(4)社会的な情勢や事件への言及がPDD者の自己理解において重要である場合があることなどが明らかにされている。さらに野村・別府（2005）は、対人的自己を表す協調的行動や協調性に言及する高機能自閉症児が健常児と比較して少ないと考えられることを指摘しており、高機能自閉症児が対人関係の中での自己理解を深めることが少ないことが推察される。

さらに発達障害者の自己理解の変容やそのプロセスに関する検討も進められている。高岡（2017）は、高機能自閉症スペクトラム障害（以下、HFASD）をもつ成人が自己理解を深めるプロセスを明らかにし、「他者参照能力」を高めることが、当事者の自己理解を深めるプロセスとして見い出された。当事者は、「他者参照能力」を高めることによって他者と自己の言動の違いを理解し、自分独自の特徴に気づいていく。山下・渡邊・井手野（2017）は、HFASDをもつ人が障害理解から肯定的な自己理解に至るプロセスを明らかにした。HFASDをもつ人が、対人関係の中での混乱の中で社会的孤立の状況に陥りつつも、重要他者との出会いによる態度形成により他者との信頼関係を構築し、さらには障害特性の理解を深める中で苦悩やアンビバレントな感情を抱く過程を経て、自己の障害の肯定的な捉え直しに至るプロセスが示された。

以上より、発達障害者の自己理解については、対人関係の中で自己理解が促進される可能性がある一方で、対人的自己に関する言及が少ないことや、対人関係の中で自己を否定的に理解する傾向があることが指摘されている。これらの指摘から、発達障害者においては、対人関係の中で適切な自己理解が促進されない場合があることが考えられる。そのため、次章で論ずる芸術活動をはじめ、対人関係に依らない自己理解促進のための支援を検討することは極めて重要であるといえる。

本章では、自己理解について概観した後、発達障害者の自己理解の必要性や困難さ、特徴について論じた。自己理解は発達障害の有無にかかわらず、キャリア形成との関連でその重要性が指摘されているが、とりわけ発達障害者にとっては、二次障害の予防や心理的な安定、本

人が望むキャリア形成をしていくためにも自己理解の促進が極めて重要であることが示された。しかし発達障害者の自己理解の困難さや曖昧さが指摘されており、発達障害者の自己理解を支える支援の検討は喫緊の課題であるといえる。特に対人関係の中での自己理解の困難さが指摘されていることから、対人関係の中で自己理解を促す方法以外の支援を検討することが重要であると考えられる。

本章では、その心理的な効用から近年注目を集めている芸術活動に焦点をあて、芸術活動が自己理解に及ぼす影響や、発達障害者の自己理解に対する芸術活動の適用可能性について論じる。芸術活動に着目する理由として、障害者の芸術活動を推進する動きが活発化していることがあげられる。厚生労働省（2019）では障害者の芸術活動の支援を行う人々を支援するモデル事業により当事者の芸術活動を推進している。平成30年6月には「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が公布・施行され、文化芸術活動を通じて障害者の個性と能力の発揮及び社会参加の促進を図ろうとしている（文化庁、2018）。

芸術表現行為とは、イメージや感情を外在化させながら、その痕跡や周囲の環境を知覚し、省察を加えてさらなるイメージや行為を探索し、環境の中にモノゴトを作り出していく行為であるとされる（岡田、2013）。そのプロセスにおいて、他者とのコミュニケーションや文化との関わりをもつことによって芸術表現が成立する。つまり言葉を自由に駆使できない人においても、イメージや感情の外在化や他者とのコミュニケーションを可能にするものと考えられる。Ulman（2001）によれば、芸術活動は自己と世界の両者を見出す方法であり、両者の関係を確立する方法である。それが心理治療の現場でも有益となる。以上のことから、対人関係の中で自己理解を促進させることが難しい発達障害者にとっても、芸術活動によって他者や世界との関係に変化がもたらされ、自己理解に影響を及ぼすことが考えられる。そのような芸術活動の可能性について、まずは文献レビューを行うことによって、現状の課題を明らかにすることが重要である。

2. 芸術活動

本章では芸術活動の効用として自己理解に関する影響について調べた研究に焦点を当て、発達障害者の芸術活動における自己理解の可能性についても論じる。第1節では、芸術活動と自己理解との関連について検討する。

i) 芸術活動が自己理解に及ぼす影響

芸術活動によって自我の育成が可能になると論じる羽野（2013）では、障害児や病弱児など特別な支援を必要とする子どもの事例を調査している。自発的な表現活動が能動的な想像力によって洗練されていき、そのなかで創造的な表現が生まれ、自我の成長につながると示唆する。創造の過程で現実の場に存在するモノを作っていくことで自己回帰的な作用が働き、自己の再発見を生み、自身を省察しながら自己を育てるのである。このように主体的な芸術活動の効用を調べた研究は存在するものの、多くの研究者は芸術療法のアプローチを用いることによって、芸術活動の心理的効用や自己理解について検討している。したがって本章では、芸術療法についても芸術活動の一環ととらえ、その影響について検討する。

Wilson（1985）では、芸術の象徴性が自我機能の発達にどのような役割を果たすかを、芸術療法を行った3つの事例から論じている。ニューヨーク大学等で芸術療法プログラムの指導を行っていたWilsonによれば、絵画等の造形芸術は、イメージを外在化することで自己を意識的に検討することを助けるとされる。形をとらない自己概念が、描画によって可視化されることで、自己について検討しやすくなる。自己理解を促進するために芸術療法的なアプローチを用いることは、わが国でも多くの研究者によって注目されている。芸術療法を概観した伊東（2014）では、芸術活動は全人格を伴う活動であり、本来もっている力を意識的に活かすことで心の成長を手助けできると述べられている。土田・田中・今野・菅谷（2015）では、大学生20名に対して現在と未来の自己像を描かせる投影描画法である「今と将来」法を実施し、描画後質問によって気分の変容や描画体験の影響について調べている。その結果、気分の変容よりも、自己明確化や自己理解といった認知的な自己認識を促す作用があることが示唆された。このことから、芸術活動を行うことで自己についての気づきや自己理解が促進される可能性が考えられる。

投影法の一つであるバウムテストを利用することによって、自己理解や自己受容が深まることを示唆する研究もある（藤中、2008）。健康な成人に樹木画を描いてもらい、直後にその絵を見ながら研究協力者に面接を行い、さらにその1週間後に樹木画と直後の面接の記録を提示し振り返ってもらうという方法で2事例が報告されている。樹木画を描いた事後に描き手自らが振り返ることで、絵に表現されている自己を明確化し、それを受容して現在の自己に位置づけ、自己確立の一助にしていく過程が示された。樹木画をもとに振り返り、自己理解や自己受

容が促進されたことに意義があるといえる。藤中 (2010) では、さらにバウムテストにPAC分析を組み合わせた研究を行っている。PAC分析とは「個」を科学する技法で、研究者の支持を受けながら研究協力者が自身の連想項目のクラスター構造から生じるイメージを感じながら探っていく過程を経る。樹木画を描いた後、PAC分析を用いて面接が行われ、描き手が描画体験を振り返った結果、体験を探索し日常行動と結びつけて考え、日頃の葛藤を受容することで、自己理解が促進されたことが示された。ただし健常な成人男性を対象とした1事例のみの報告であるため、般化可能と捉えるには限界がある。他にもコラージュ法 (青木智子, 2009) などの芸術療法によって、自己理解が得られたことが示唆されている。

以上より、芸術活動には自己理解を促進させる機能があることが考えられる。ただ、特定の芸術療法でのみ調査された結果であったり、少数のサンプリングによる事例報告であることから、主体的に芸術活動を行う人々の自己理解についても、さらに検証する必要がある。

ii) 発達障害をもつ人の芸術活動

前節では、芸術活動と自己理解との関連について検討した研究に着目し、自己理解が促進されるという示唆を得た。本節では発達障害者の芸術活動と自己理解との関連についての検討を試みるが、そのような研究は数少ない。そこで現状の知見を調べ、今後の課題を明らかにする。また、発達障害者の芸術活動に関する研究の多くは自閉スペクトラム症 (以下、ASD) 者を対象としていることから、本節ではASD者を対象とした研究について論じる。

ASDをもつ子どもに対する芸術療法の効用について調べたSchweizer, Knorth & Spreen (2014) では、オランダ語及び英語で著された18本の文献レビューを行い、そのうちの15の研究において、芸術療法によって自己イメージが向上されたと論じている。自己肯定感や自己感覚を増し、自己概念が高められたことや、洞察を得ると同時に自身の自閉傾向についても理解が進んだことが示されている。このことから、ASDをもつ人にとっても芸術活動によって自己理解が促進される可能性が考えられる。

わが国においても、ASD者に芸術療法を試みた研究が報告されている。内藤・井上 (2010) では、ASDをもつ2人の児童に対し、コラージュ療法を行った。その結果、制作前よりも制作後の方が、また回数を重ねるにしたがって気分の改善が見られた。2事例とも回数を重ねるごとに、日常生活でも適応的な行動が増えた。これ

らの結果を踏まえ、コラージュ療法による内面の意識化や相互作用、コミュニケーションといった媒介的な要因が働き、気分の改善が起これ、自己肯定感が得られることが示唆されている。創作は、ASDをもつ子どもが自己の内面を理解するための支援方法の一つとなりうることが示された。

このように自己理解につながる知見を示す研究はあるものの、ASD者の芸術活動について検討した研究は、その描画の特徴について指摘するものが多い。高機能ASDの子どもにバウムテストを行った研究 (廣澤・大山, 2007) では、部分認知が優位で特定の箇所は観察したそのままに写実されている一方、それらを統合する際に全体像がアンバランスになるという特徴が明らかになっている。このことから、刻々と変わる他者の表情や対人関係のあり方を把握することが困難であると考えられ、そのような理解の困難さが自己理解の妨げにもなっていることが示されたといえる。寺山 (2002) では、ASD児の描画には限られた対象への関心の強さ、写実的表現、細部へのこだわり、もしくは簡略化といった独特の特徴があり、イメージ操作や感情表出も行われていることを示している。話し言葉に困難を示すASD児でも、イメージ操作が可能であり、映像による思考ができていることがうかがえる。

杉山 (2002) では、ASDをもつ青年が、はるか昔の幼稚園のある1日を10年間にわたって数千枚の連続画として描いた事例が報告されている。幼稚園時代に多動でしばしばパニックを起こした彼が、就労して新しい生活に入ったことに気づき、過去の日常場面を描くことで自分を振り返り、青年期の自分を受け入れるようになったと推察されている。ASD者にとっての描画は、言語的ハンディキャップを補完する自己表出の手段であるとともに、描画の特徴を丁寧に調べることによって、創作が当事者の自己認識を高めていることが明らかとなる可能性が考えられる。

以上より、ASD者の芸術活動には独特の特徴があることが事例研究によって明らかではあるものの、芸術活動が自己に対する気づきや自己理解へとつながることを示すためには、さらに研究を発展させることが今後の課題となる。少数の事例や特定の芸術療法、子どもを対象とした研究が多い現状とは異なるアプローチが必要である。発達障害者が治療場面だけではなく、普段の生活の中で行う芸術活動についても自己理解との関連を調べることや、成人期以降についても検討することが課題といえる。

iii) 知的障害をもつ人の芸術活動の可能性

発達障害者には知的障害が併存していることが多いことから、知的障害をもつ人の芸術活動の可能性についても検討することは重要である。わが国では知的障害をもつ人が芸術活動に参加する例は多くあり、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が施行されたことから、障害をもつ人の芸術活動に関する支援について、具体的な検証が求められる。そこで本節では、知的障害者の芸術活動と自己理解との関連について検討する。

ディスアビリティ・アート（障害者アート）の先進国といわれる英国では、障害者が参加する芸術活動は、当事者にポジティブなアイデンティティや変化を生み出す力を与え、自分自身の見方を認識し、新たな関係性を築くことにつながると論じられている（Crow, 1992）。杉田（2012）は、知的障害者入所施設に暮らす30代の男性のライフストーリーをその両親の語りと施設職員の手記からたどっている。ASDをもち言葉で意思を伝えることが難しく、暴力などの問題行動が多かった当事者が、創作ができる環境を整えられ、主体的な芸術活動が行えるようになったことで問題行動が減り、展覧会に出品された作品が優秀賞を受賞するまでに至った経緯が報告されている。作品の受賞により取材を受けた際には、インタビュアーに握手を求めるという行為が自発的に行われ、他者とのコミュニケーションにも変化が見られたことが明らかにされた。このような変化の裏に、自己が抱える不安を軽減させ、自分の生活世界を広げたことが示唆されている。

2つの福祉施設において芸術活動を行う人々の調査を行った川井田（2010）では、表現活動を続けるうちに自己変容がなされた事例が複数報告されている。絵のモチーフが変わるとともに「自分は自分でいいと思えた」という自己への認識が変わったり、自閉傾向のある人が絵を描くことを機に大勢の人と関わることができ、他者の存在について理解を深めたことが明らかとなっている。

以上より、知的障害者の芸術活動は他者との関係や自己認識に変化をもたらし、生きづらさを軽減させ、世界を広げるきっかけとなりうることが示されたものの、自己理解の促進に関する研究はまだ不十分である。したがって知的障害者の芸術活動と自己理解の関連について実証研究を行い、支援のあり方を検討することが求められる。

3. 終わりに

本稿では、発達障害者が自己理解を促進させることの

重要性と、その支援の可能性として芸術活動に着目し、自己理解との関連について検証を行った。もっとも、発達障害をもつ人の誰もが芸術活動に向いているとはいえないだろう。アメリカの心理学者ガードナーの多重知能理論を読み解いた子安（2005）では、知能＝学校知能（academic intelligence）＋人格的知能（personal intelligence）＋芸術的知能（artistic intelligence）と論じている。学校知能とは、学校及び社会で重視される能力であり、いわゆるIQに相当する。人格的知能とは、自己理解及び他者理解に必要な能力のこととされ、近年の理論でいえば“EQ”と称される情動的知能と認識される。多重知能理論の特徴は、この2つに加えて、芸術的知能を知能の定義に含めたこととされる。芸術的知能には音楽的知能、身体－運動的知能、空間的知能の一部（美術・造形・デザインなど）が含まれるという。ガードナーは知能を「個人が特定の文化的状況の中で重要となる問題を解決したり、作品を作り上げたりすることを可能にする能力あるいは一連の能力である」（Walters & Gardner, 1986）と定義している。この多重知能理論を援用すれば、発達障害をもつ人が学校知能（IQ）のレベルにかかわらず、芸術的知能を高めたり、あるいは人格的知能を高め、自己理解や他者理解を促進させるといったことが考えられるのではないだろうか。

しかしながら、発達障害をもつ人の芸術活動については、少しずつ知見が出てきているものの、実証研究が不足していることや、特定の芸術療法の効果を検証することにとどまっていることから、治療場面に限らず当事者が取り組む芸術活動と自己理解との関連について研究を行う必要がある。とりわけ社会参加が重要となる成人期の当事者を対象として、個々の特性を見極めた上で行われる支援の一つとして、芸術活動と自己理解との関連は発展的な研究を進めるべき領域であると考えられる。

引用文献

- 青木万里（2009）．自己理解に関する文献研究 埼玉純真短期大学研究論文集, 2, 1-15.
- 青木智子（2009）．マンダラ・コラージュ自己理解の可能性― 文京学院大学保健医療技術学部紀要, 2, 31-40.
- 文化庁（2018）．障害者による文化芸術活動の推進に関する法律の施行について Retrieved from http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/geijutsu_bunka/shogaisha_bunkageijutsu/1406260.html (2019年3月3日)

- Crow, L (1992). "On Our Terms" Re-defines integration for disabled artists. *Women's Art Magazine*, 47, 4-6.
- Damon, W. & Hart, D. (1988). *Self-understanding in childhood and adolescence*. New York: Cambridge University Press.
- 藤中隆久 (2008). バウムテストを使用した二つの事例研究 *心理臨床学研究*, 26, 184-192.
- 藤中隆久 (2010). バウムテストを利用して自己理解のための体験探索を促進する方法 *心理臨床学研究*, 28, 303-312.
- 羽野ゆつ子 (2013). アート活動をととした心理発達—特別な支援を必要とする子どもの事例を中心に— *大阪成蹊大学芸術学部紀要*, 9, 32-42.
- 廣澤愛子・大山卓 (2007). 高機能広汎性発達障害児の描画特徴に関する一研究—バウムテストを用いて— *愛知教育大学教育実践総合センター紀要*, 10, 25-34.
- 伊東留美 (2014). アートセラピーと美術教育についての一考察 *人間関係研究 南山大学人間関係研究センター紀要*, 13, 139-152.
- James, W. (1892). *Psychology: brefer course*. New York: Henry Holt and Company. (ジェームズW. 今田寛 (訳) (1992). *心理学 (上)* 岩波書店)
- 梶田叡一 (1988). 自己意識の心理学 *東京大学出版会*
- 金井美保子・上村恵津子 (2007). 中学生の自己概念・適応感・精神的健康に関する臨床心理学的研究—アスペルガー障害の生徒と健常生徒を比較して— *信州心理臨床紀要*, 6, 5-14.
- 川井田祥子 (2010). 障害者の芸術的表現による社会的包摂とその支援に関する研究 *文化経済学*, 7(2), 41-52.
- 小島道生 (2014). 高機能自閉症児の自己理解の特性と他者との調整機能の関連 *発達研究*, 28, 83-92.
- 向後礼子 (2015). 発達障害者の就労支援のために—職業リハビリテーションの専門支援へのアクセスの課題— *職業研究*, 夏季号, 6-7.
- 厚生労働省 (2001). キャリア・コンサルティング技法等に関する調査研究報告書の概要 Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/houdou/0105/h0517-3.html> (2019年3月3日)
- 厚生労働省 (2019). 障害者の芸術文化活動 Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/sanka/bunka.html (2019年3月3日)
- 子安増生 (2005). 芸術心理学の新しいかたち—多重知能理論の展開— 子安増生 (編著) *心理学の新しいかたち 第11巻 芸術心理学の新しいかたち* (pp. 1-27) 誠信書房
- 松為信雄 (2015). 労働における合理的配慮 (特集1 障害者差別解消法と合理的配慮) *日本発達障害者連盟 (編) 発達障害白書2016年版* (pp. 12-13) 明石書店
- 文部科学省 (2011). 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申) 中央教育審議会 Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf
- 内藤暢彦・井上清子 (2010). 広汎性発達障害児に対するカラージュ療法の適用 *カウンセリング研究*, 43, 267-277.
- 内藤孝子 (2009). 「教育から就業への移行実態調査」の結果 調査研究報告書No. 88 発達障害者の就労支援の課題に関する研究, pp.107-127 障害者職業総合センター
- 野村香代・別府哲 (2005). 高機能自閉症児における自己概念の発達 *日本特殊教育学会第43回大会発表論文集*, 406.
- 岡田猛 (2013). 芸術表現の捉え方についての一考察: 「芸術の認知科学」特集号の序に代えて *認知科学*, 20, 10-18.
- 佐久間路子・遠藤利彦・無藤隆 (2000). 幼児期・児童期における自己理解の発達: 内容的側面と評価的側面に着目して *発達心理学研究*, 11, 176-187.
- 佐藤由宇・櫻井未央 (2010). 広汎性発達障害者の自伝に見られる自己の様相 *発達心理学研究*, 21, 147-157.
- Schweizer, C., Knorth, E. J., & Spreen, M. (2014). Art therapy with children with autism spectrum disorders: a review of clinical case descriptions on 'what works'. *The Arts in Psychotherapy*, 41, 577-593.
- 杉田穂子 (2012). アウトサイダー・アートが福祉の世界に投げかけるもの—ある受賞者のライフストーリーを通して— *総合文化研究所年報*, 20, 81-96.
- 杉浦京子 (2002). 臨床心理学講義—実習を通して学ぶ— 朱鷺書房
- 杉山登志郎 (2002). 発達障害の臨床における描画の意味臨床描画研究, 17, 22-36.
- 高岡佑社 (2017). 高機能自閉症スペクトラム障害を持つ成人が自己理解を深めるプロセスに関する質的研究 *臨床心理学*, 17, 231-242.
- 高瀬智恵・今村佐智子・奥村弥生・小脇智佳子・松久眞

- 実 (2016). 発達障害学生の自己理解を進めるためのアプローチ—就労に向けた支援システムにつなげた事例から— プール学院大学研究紀要, 57, 303-317.
- 滝吉美知香・田中真理 (2009). 思春期・青年期における自己理解—自己理解モデルを用いて— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 57, 299-320.
- 滝吉美知香・田中真理 (2011a). 自閉症スペクトラム障害者の自己に関する研究動向と課題 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60, 497-521.
- 滝吉美知香・田中真理 (2011b). 思春期・青年期の広汎性発達障害者における自己理解 発達心理学研究, 22, 215-227.
- 田中真理・廣澤満之・滝吉美智香・山崎透 (2006). 軽度発達障害児における自己意識の発達—自己への疑問と障害告知の観点から— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 54, 431-443.
- 寺山千代子 (2002). 自閉症児・者の描画活動とその表現臨床描画研究, 17, 5-21.
- 土田恭史・田中勝博・今野裕之・菅谷正史 (2015). 「今と将来」法による描画後体験や気分感情へ及ぼす影響に関する研究 目白大学心理学研究, 11, 29-39.
- Ulman, E. (2001). Art therapy: problems of definition. *American Journal of Art Therapy*, 40, 16-26.
- Walters, J. M., & Gardner, H. (1986). The theory of multiple intelligence: Some issues and answers. In R. J. Sternberg & R. K. Wagner (Eds.), *Practical intelligence: Nature and origins of competence in the everyday world* (pp. 163-182). Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- 渡部昌平・渡部諭・小池孝範 (2015). キャリア教育の効果測定のための自己理解尺度の作成について 秋田県立大学総合科学研究集報, 16, 43-50.
- Whitney-Thomas, J. & Moloney, M. (2001). Who i am and what i want: adolescents' self-definition and struggles. *The Council for Exceptional Children*, 67, 375-389.
- Wilson, L. (1985). Symbolism and art therapy: I. Symbolism's role in the development of ego functions. *American Journal of Art Therapy*, 23, 79-88.
- 山根隆宏 (2016). 知的障害児・者の自己の発達に関する文献的考察—自己概念・自己評価に焦点を当てて— 奈良女子大学大学院人間文化研究科年報, 31, 173-181.
- 山下亜矢子・渡邊久美・井手野紗枝 (2017). 高機能自閉症スペクトラム障害をもつ人が障害理解から肯定的な自己理解に至るプロセス 日本精神保健看護学会誌, 26, 31-39.

(指導教員 下山晴彦教授)

付記

本研究は、科研費の基盤（A）課題番号16H02056（代表 下山晴彦）の支援を受けた。